

文化 第82巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷  
平成31年3月29日発行

ドイツ語未来形の歴史的発達における  
würde + 不定詞の位置づけ

嶋 崎 啓

## ドイツ語未来形の歴史的発達における würde + 不定詞の位置づけ

嶋 崎 啓

### 1. 未来形の歴史的発達における問題点

ゲルマン語はラテン語の amabo「私は愛するだろう」のように一つの動詞が語形変化することによって作られる総合的な形式の未来形を持たなかった。そこで各ゲルマン語は will や shall のような法助動詞と不定詞を組み合わせる分析的形式の未来形を発達させた。ドイツ語も他のゲルマン語と同様分析的形式の未来形を発達させたが、不定詞と結びついたのは法助動詞ではなく、「なる」を意味する werden であった。

will や shall のような法助動詞と werden の違いは、法助動詞が文字通り「法」Modus を表すのに対し、werden が「発生・生成」を意味することにある。すなわち、他のゲルマン語では「法」から「時制」への移行が行われたのに対し、ドイツ語ではその移行が生じなかった。古高ドイツ語（750-1050年頃）から中高ドイツ語（1050-1350年頃）においては、未来を表すのによく sollen (= shall) や wollen (= will) が用いられたので、他のゲルマン語のように「法」から「時制」への移行が行われる可能性は十分にあったはずである。しかし、初期新高ドイツ語（1350-1650年頃）において werden が sollen や wollen の使用範囲に食い込む形で広がり、sollen や wollen の使用は本来の「法」の範囲に押し戻されていった。

werden が不定詞と結びつくことの特異性は、その統語意味論上の点にもある。werden は「なる」を表すので、本来繫辞として Er wird Lehrer. 「彼は教師になる」の Lehrer 「教師」のように主格主語との同一性を表す名詞か、もしくは、Er wird krank. 「彼は病気になる」の krank 「病気の」のような形容詞と結びつくのが自然であり、主格主語の動作を表す不定詞とは本来結びつかない。Er wird kommen. は文字通りには、「彼は『来るということ（行為）』になる」を意味し、「彼」=「来るという行為」という等式は成り立たないはずで

ある。もし不定詞ではなく現在分詞と結びついて、Er wird kommend. と言うのであれば、「彼は『来る人』になる→彼はこれから来る」を意味するので、主格主語と述語は等号で結ばれる。従来の研究では werden + 不定詞が werden + 現在分詞における現在分詞の語末音消失によって生まれたという考えも出されたが、意味の点で見れば自然な考えとも言える。

しかし、この werden + 不定詞が werden + 現在分詞から生まれたという考えは今では否定されている（嶋崎 2017: 251 頁を参照）。そこで筆者は嶋崎（2017）において、werden が不定詞を伴うようになったのは、beginnen + 不定詞から影響を受けた結果であるという考えを提示した。すなわち、未来形の werden + 不定詞における werden は直説法現在であるが、その形が発達する前に、<werden の直説法過去> + 不定詞という形が先に発達したのである（以下、<werden の直説法過去> + 不定詞を「ward + 不定詞」と表記する。ward は中高ドイツ語～初期新高ドイツ語の werden の直説法過去 3 人称単数）。これは、beginnen + 不定詞においては beginnen が多くの場合、直説法過去であったことに関わる。つまり、まず <beginnen の直説法過去> + 不定詞と似た意味を表すものとして ward + 不定詞が発達した（以下、<beginnen の直説法過去> + 不定詞を「begunde/began + 不定詞」と表記する。begunde と began はいずれも中高ドイツ語～初期新高ドイツ語の beginnen の直説法過去 3 人称単数）。そして ward + 不定詞の発達によって、本来不自然であった werden と不定詞の結びつきが自然になったあとで、<werden の直説法現在> + 不定詞が発達したということである（以下、<werden の直説法現在> + 不定詞を「wirt + 不定詞」と表記する。wirt は中高ドイツ語～初期新高ドイツ語の werden の直説法現在 3 人称単数）。

ここで、ward + 不定詞が一旦発達し、のちに消失したとすれば、この形式が何を表すために用いられたかが問われるであろう。筆者の調査（嶋崎 2017）によれば、begunde/began + 不定詞、ward + 不定詞、wirt + 不定詞の意味機能や発達時期は次のようにまとめられる。

- ① begunde/began + 不定詞は、現代ドイツ語の <beginnen の直説法過去> + zu 不定詞が「～し始めた」という「開始」を表すのとは異なり、「言った」のような発言や、「見た」のような知覚や、「泣いた」のような理性で制御できない感情や生理や激しい動作を表す場合が多い（その際、特に

「開始」を表さない。

- ② ward + 不定詞は、中高ドイツ語の *begunde/began* + 不定詞と同じように、発言や知覚や理性で制御できない動作を表す場合が多い。
- ③ *begunde/began* + 不定詞は中高ドイツ語で多用され、初期新高ドイツ語で廃れる。*ward* + 不定詞は初期新高ドイツ語前期（15世紀前半）で発達し、初期新高ドイツ語後期（16世紀後半～17世紀）に廃れる。*wirt* + 不定詞は初期新高ドイツ語中期（1500年前後）に発達し、現代ドイツ語まで使用され続ける。

具体的には、中高ドイツ語の *begunde/began* + 不定詞が知覚を表す例として次の (1) を、発言を表す例として (2) を、理性で制御できない感情を表す例として (3) を挙げることができる（さらに、(1) の主文の *begunde gevallen* も「気に入る」という感情を表す）。

- (1) *nu Tristan den künic sehen began*, / *er begunde im wol gevallen vor den andern allen*. (Tristan 3240-3242) (トリスタンは王〔マルケ〕を見ると、王のことが他の誰よりも気に入った)
- (2) *sus begunde er sînem hêrren sagen* / *von ende sîniu maere* (Tristan 3312-3313) (このように彼〔狩人〕は自分の主君〔マルケ〕に彼〔トリスタン〕のことを始めから話した)
- (3) *Gurmûn dô trûren began* / *und hiez gebieten al zehant* / *über al daz rîche z'Îrlant* (Tristan 7204-7206) (グルムーンは悲しんで、すぐにイールラント全土に〔クルネワールからの入国拒否を〕要求するよう命じた)

また、*ward* + 不定詞が知覚を表す例として次の (4) が、発言を表す例として (5) が、理性で制御できない感情を表す例として (6) が挙げられる。

- (4) *Der taidinch was so vil beschehen*, / *Daz sich her Neithart ward versehen*, / *Si gtörstin nit mer stechen*. (Ring 646-648) (議論があまりにたくさん起こったので、ネイトハルト殿は、彼らがもはや馬上槍試合をする勇気を持たぬことを感づいた)
- (5) 'Enruoch!' so *wurden seu im sagen* (Ring 3603) (そこで「気に入るな」と彼

ら〔リュエレンモストとナベルライバー〕は彼〔フリッツ〕に言った)

- (6) Des ward do Rüefel lachen. (Ring 6009) (その時そのこと〔メツリに叱責されたこと〕をリュエフルは笑った)

ここで注目されるのは、ward + 不定詞は多くの場合、begunde/began + 不定詞と同様、発言や知覚や理性で制御できない動作といった限定された意味を表すのに対し、現代ドイツ語の未来形の <werden の直説法現在 > + 不定詞にはそのような意味の制限は見られないということである。もし ward + 不定詞の発達によって wirt + 不定詞が発達したとすれば、その関連が問われねばならない。そこで以下で、嶋崎 (2017) の調査結果にさらに 1509 年刊行の『フォルトゥナートゥス』からの調査結果を加えて、未来形の歴史的発達の筋道を考察したい。

## 2. 初期新高ドイツ語における werden + 不定詞の出現頻度

初期新高ドイツ語期の三つの作品『指輪』Ring、『トリストラント』Tristrant、『フォルトゥナートゥス』Fortunatus における werden + 不定詞の用例数を下に表にして挙げる。また、中高ドイツ語の『トリスタン』Tristan には werden + 不定詞の例がなかったことも示しておく。調査箇所は、『トリスタン』の 1～9982 行、『指輪』の 1～8656 行、『トリストラント』の 1～2529 行、『フォルトゥナートゥス』の作品全体である。数字は werden の数を示し、Er wird sehen und sprechen のような例は不定詞の数が複数であっても 1 と数えられる。werde は werden の接続法 1 式、würde は接続法 2 式を表す。括弧内の百分率は小数点以下を四捨五入している。『フォルトゥナートゥス』で百分率の合計が 100% にならないのは四捨五入の結果である。

	Tristan (1210 年頃)	Ring (1400 年頃)	Tristrant (1484 年)	Fortunatus (1509 年)
wirt + 不定詞	0	9 (13%)	7 (14%)	20 (27%)
ward + 不定詞	0	50 (72%)	20 (40%)	22 (30%)
werde + 不定詞	0	4 ( 6%)	4 ( 8%)	3 ( 4%)
würde + 不定詞	0	6 ( 9%)	19 (38%)	28 (38%)

上の表で、『指輪』と『トリストラント』の比較では、ward + 不定詞の使用頻度が下がるが、wirt + 不定詞の使用頻度には大きな違いは見られず、würde + 不定詞の使用頻度が上がるということが分かる。また、『トリストラント』と『フォルトゥナートゥス』の比較では、ward + 不定詞の使用頻度は引き続き下がり、wirt + 不定詞の使用が増えるが、würde + 不定詞の使用頻度には変化が見られない。すなわち、まず ward + 不定詞が衰退して、würde + 不定詞が発達し、そのあとで wirt + 不定詞が発達したということが推測される。勿論、調査対象があまりにも少ないので、この推測が正しいかは今後調査対象を増やして検証した上でしか分からないが、しかし、現時点では ward + 不定詞が衰退し、wirt + 不定詞が発達しただけではなく、würde + 不定詞の発達という中間段階があったであろうということは指摘しておきたい。

いずれにしても、ward + 不定詞が特定の意味を表し、wirt + 不定詞にはそのような意味的制限がないとすれば、上に挙げた発達の時代差の中でそれぞれの werden + 不定詞がどのような意味を表したかが問題になる。そこで以下で、各資料の werden + 不定詞の各形式がどのような意味を表したかを示したい。

### 3. 初期新高ドイツ語期における werden + 不定詞の意味

以下、『指輪』、『トリストラント』における werden + 不定詞の各形式の用法と意味を見ていく（『フォルトゥナートゥス』の具体例には紙幅の都合によりほとんど触れられない）。

#### 3.1 『指輪』の werden + 不定詞

すでに『指輪』の ward + 不定詞が、知覚や発言や理性で制御できない感情・生理や激しい動作を表すことは上例 (4)-(6) や嶋崎 (2017) で示したので、ここでは、それ以外の werden + 不定詞の形式を扱う。

##### 3.1.1 『指輪』の wird + 不定詞

『指輪』の wird + 不定詞には次のような知覚を表す例がいくつか見られる。

- (7) Die wirst du nach enander sehen, / Iecleicheu besunder schiere, / Mit ir gepotten, der sein viere (Ring 4575-4577) (お前〔ベルチ〕はそれ〔正義の下の十の美德〕をそれぞれ順次、それぞれに備わる四つの命令とともに

にすぐに知ることになる)

- (8) Pei den **wirst** du ieso **sehen** / Punden wol auf sechszehen. (Ring 4901-4902) (お前〔ベルチ〕はすぐにそれら〔謙虚や慎みなど〕に備わった少なくとも 16 に達する項目を知ることになる)
- (9) Du muost dich heven aber aus / Und steigen auf meins puolen haus: / So **wirst** du **sehen** durch daz tach, / Waz sei tuo und was sei schaff. (Ring 1482-1485) (お前〔自分への呼びかけ〕は抜け出して、恋人の家の上へ上がらねばならぬ。そうすれば、お前は屋根から、彼女が何をし、何をやっているかが分かるだろう)

また、次のような理性で制御できない生理現象を表す例もある。

- (10) Und chümpft er in seinr herren land, / Daz pläterlein zerprist ze hand, / Daz pluot **wirt** hin so **fiessen** (Ring 2239-2241) (彼〔ベルチ〕が自分の領地に入り、その結果浮き袋が即座に破ければ、血が流れ出すだろう)

『指輪』には、「言う」のような発言を表す **wirt** + 不定詞は見られない。他に、次ような一般的な動作や現象を表す例もある。

- (11) So **wirt** er mich leicht **nemen** aus / Und **füeren** mich zuos arzetz haus / vil schier und auch geswinde (Ring 1995-1997) (そうすれば、お父さんは私をおそらく連れ出して、医者之家にすぐに急いで連れて行くだろう)
- (12) Da **wirt** man ir der wurtzen **geben**, / Wil mans behalten pei dem leben. (Ring 2027-2028) (もし人が彼女を生かしておこうと思うなら、そこで人は彼女に薬草を与えるだろう)
- (13) Daz **wirt** dir an dem abent guot, / So man dich im **wirt** legen zuo. (Ring 2232-2233) (人がお前〔メツリ〕を彼〔ベルチ〕と共に寝させるその晩に、それ〔血〕はお前にとって有益なものとなる)
- (14) Hast du danne weibes nicht, / Chain sälde deinem leib geschicht; / So wilt dein aigen pluot verderben, / Ein frömder gast der **wirt** dich **erben**. (Ring 2713-2716) (あなた〔ベルチ〕が妻を娶らなければ、あなたには幸福が生じない。そうなれば、あなた自身の血が腐るだろうし、よその

人があなたの財産を相続するだろう)

- (15) Ist er faul und schlafft gern, / Des wirt er allesamt enbern, / So daz chindel wirt von not / Singent: “Ätti, gib mir prott!” (Ring 3737-3740) (彼 [ベルチ] が怠惰で寝るのが好きだとしても、子供が空腹から「お父ちゃん、パンを頂戴」と歌えば、そうしたすべて [の悪癖] をなくすだろう)

このように、『指輪』の wirt + 不定詞は、ward + 不定詞との意味的な連関を保ちつつ、そこから離れた用法を増やし始めているように見える。

### 3. 1. 2 『指輪』の werde + 不定詞

『指輪』の werde + 不定詞はまず次のように間接話法で現れる。

- (16) Ir seit so gar ein biderman, / Daz ich dehainen zwivel han, / Wie irs jemant fürbas sagen / Werdint, mein vil sendes klagen. (Ring 2039-2042)  
(あなた [医者] は非常に誠実な人なので、あなたがそれを、つまり私の苦しい嘆きを、他の誰かに言うだろうなどという疑いを私は抱きません)
- (17) Wilt, daz dichs mas nicht werd gereuwen, / So scholt dus wol und endleich keuwen. (Ring 4296-4297) (あなたは、食事があなたを不快にしないことを望むなら、それをよく最後まで噛まねばならない)

他に、下のように、「～するために」という目的や、「～するまで」という主文との関係においてまだ生じていない事態を表す場合にも werde + 不定詞は用いられる。このような、間接話法でなく、「未然」の事態を表すのに用いられる接続法 1 式は現代ドイツ語では廃れたが、この時代には一般的であり、それが werden にも適用されているということが分かる。

- (18) Dar umb so schült ir gerne / Üeben euch in sölhen dingen, / Daz euch dest offer werd gelingen / In ernst und auch in stritten. (Ring 905-908) (それゆえ、真剣勝負や戦闘においてもそれだけいっそう多くあなた達が成功するために、あなた達はこのようなことを練習した方がよい)
- (19) Der schült ir auch gegpeiten, / Bis daz seu werden streiten (Ring 8224)



(あなた達〔勇士たち〕も、彼ら〔巨人〕が戦いを始めるまで、彼らを待つべきだ)

上の *werde* + 不定詞のうち (16) だけは不定詞の動詞が発言を表し、*ward* + 不定詞と関連するが、それ以外の例では限定された意味を表していない。

### 3. 1. 3 *würde* + 不定詞

『指輪』に現れる *würde* + 不定詞の多くは、「もし～だったら～だろう」という非現実の仮定の事態を表す。それは「もし～だったら」という前提にも、「～だろう」という帰結にも用いられる。まず、「もし～だったら」という前提を表す *würde* + 不定詞の例を挙げる。(ただし、(21) は間接話法という理由で *würde* を用いている可能性もある。)

(20) *Waz hulffi, ob du dir die welt / Gewunnen hietst mit allem gelt / Und dein sel wurd leiden haben?* (Ring 2537-2539) (もしお前がお金をすべて使って世界を獲得し、お前の魂が苦難を受けるとすれば、何の役に立つだろうか)

(21) *Dar umb so han ich in dem muot / Ein dinch, das möcht wol wesen guot, / Ob mir so wurd gelingen, / Daz ich es zuo möcht pringen, / Daz Triefnas [...] Mätzen nemen wolt ze recht.* (Ring 3576-3577) (それゆえ、トリエフナスがメツェと正式に結婚したいと思っていることを私〔リュエレンモスト〕が実現することが私にうまくいけば、それはよいことだろうと思っている)

次は、「～だろう」という非現実の仮定に対する帰結を表す *würde* + 不定詞の例である。

(22) *Ie mer ich mich so wolt verpinden, / Ie e mir wurd von we geswinden* (Ring 339-340) (私は自分の体を縛ろうとすればするほど、痛みで早く気を失うだろう)

(23) *Ich muoss sei han, es tuot mir not: / Anders ich würd ligen tot.* (Ring 2663-2664) (私〔ベルチ〕は彼女〔メツリ〕と結婚しなければならな

い、何が何でも。そうでなければ私は死ぬでしょう)

- (24) Der nicht wolt lernen fürsich sehen, / Dem **wurd** ze gleicher weis  
geschehen, / Sam der fleugen gschach hie vor / Pei der weisen ämbess  
tor (Ring 5007-5010) (先を見ることを学ぼうとしない者には、かつて賢  
明な蟻の家の前で蠅に起こったのと同じことが起こるだろう)

他には、「～するために」という目的を表す文にかかる関係文中の *würde* + 不定詞もある。まだ実現していない事態を表すという意味で接続法が用いられているが、上の (18) では、主文が現在形であったので「～するために」が接続法 1 式で表されていたが、こちらは主文が過去形であるため「時制の一致」で接続法 2 式になっている。

- (25) Und santend baidenthalf einn jungen, / Daz er scholt die gloggen leuten,  
/ Die den turner **wurd** beteuten. (Ring 1027-1029) ([槍試合の参加者たち] 馬上槍試合を告知する鐘を鳴らすために、両軍から一人の若者を派遣した)

上の例のうち、(22) (および場合によっては (23) も) のみ理性で制御されない生理現象を表すので、*ward* + 不定詞との関連を保っているが、それ以外は特定の限定された意味を表さず、*würde* + 不定詞と *ward* + 不定詞との関連は弱いようである。

### 3.2 『トリストラント』の *werden* + 不定詞

『トリストラント』についても、*ward* + 不定詞が特定の限定された意味を表すことは嶋崎 (2017) で示したので、それ以外の *werden* + 不定詞を見る。

#### 3.2.1 『トリストラント』の *wirt* + 不定詞

『トリストラント』の *wirt* + 不定詞は、*ward* + 不定詞のように特定の意味を表すものがある。まず、次の例は知覚を表す例である。

- (26) jch wil dir den held bringen. dem truchseß zû schaden auf ein vermessen  
streit. darinn du selbs **sehen** vnd **hören wirst**. das der betrieger den

wurme nicht bestanden noch ertöt hat. (Tristrant 909-912) (私〔イザルデ〕は内膳頭をぎゃふんと言わせるために、思い切った決闘を設定して、あなた〔父王〕のもとへその勇者〔トリストラント〕を連れてきましょう。その決闘であなたはご自身で、その詐欺師〔内膳頭〕が竜を打ちましても、殺してもいないことを、見て、聞くことでしょう)

- (27) geet jr mitt mir. da wert jr sehen. wie dye sach vmb sy beyde gestalt ist. (Tristrant 1795) (あなた〔マルク王〕は私〔小人〕を一緒に行って下さい。そうすれば、あなたは、彼ら二人〔トリストラントとイザルデ〕の実情がどうなのかを見るでしょう)

また、次のように発言を表す例もある。

- (28) Ey wie ein schöne ere eüch das wirt. wo man in den landen sagen wirt. eürs vatter schüsseltrager hab eüch mit listen vnd vnwarheyt eürem vatter abgeredt. (Tristrant 863-866) (あなた〔イザルデ〕のお父様の皿運び〔内膳頭〕が策略といかさまによってあなたのお父様からあなたを娶ったと人々が国中で言うとしたら、それはあなたに何とご立派な名誉となるでしょう)

また、次のように理性で制御できない感情や生理現象を表す例もある。

- (29) wenn bestest du in mit vnrecht. das wirt dich reüen. (Tristrant 1017-1018) (というのも、あなた〔内膳頭〕が不正なまま彼〔トリストラント〕に勝てば、あなたはそれを後悔するだろう)
- (30) jecz wirt jch kalte als ein eyß. vnd wil also erfriern. yecz wird jch brynnen als ein feür. vnd dringet der schweiß durch alle meine gelyder. (Tristrant 1192-1194) (今私〔イザルデ〕は氷のように冷たくなり、そのまま凍りそうかと思うと、またすぐに火のように燃えて、汗が体中から噴き出す)

『トリストラント』の wirt + 不定詞には、特定の限定された意味を表さない例もある。

- (31) bitt mit vnderthenigkeit. mich ewer vrlaube haben lassen. auch darzü helffen mit gesinde. vnd wz mir zū solicher raiß noturfft sein wirt. (Tristrant 87-89) (私〔トリストラント〕にあなた〔リバリン〕が暇を与え、従者およびそのような旅で私に必要となりそうなものによって援助下さいますよう恐れながら御願い申し上げます)
- (32) O wee wie thûn jch dann so groß vnrecht jch wird den tag gen meyn freunden nimmer mer **überwinden** noch gen jm. vnd auch mir selbs. (Tristrant 1217-1219) (ああ、どうして私〔イザルデ〕がそんな間違ったことを行えようか。そんなことをすれば、私はもはや友に対しても、彼〔トリストラント〕や自分に対しても、この日乗り越えることはできないだろう)

なお、上の (31) は不定詞が sein 「～である」であり、werden が単に「なる」を意味するかぎり、用いられないはずの語である。なぜなら、werden は繫辞としてそれ自体が述語内容詞となる名詞や形容詞を取るのので、例えば、Er wird Arzt. と言えば「彼は医者になる」を意味し、sein 「～である」を必要としない。ここにもし sein を追加して Er wird Arzt sein. と言うと、「彼は医者であるということになる」を意味し、繫辞の重複によって文の意味が不明瞭になるからである。sein が werden + 不定詞の不定詞として用いられるということは、この形式の文法化が進んでいることの証拠である。

ただし、『トリストラント』の wirt + 不定詞は多くの場合 ward + 不定詞との意味的連関を比較的よく保っているということも指摘する必要があるだろう。

### 3. 2. 2 werde + 不定詞

『トリストラント』の werde + 不定詞は、『指輪』の場合と同様、間接話法で用いられる。

- (33) Jch sihe wol du beleibest. vnd meyn meyn herr künig Marchs werde frey vor dyr sein. (Tristrant 376-377) (お前〔モルオールト〕が残ることが私〔トリストラント〕には分かったし、また、我が君マルク王がお前から自由になるだろうと私は思う)

- (34) so sagt Tristranten zû. Er werd eüch ein rayß tûn [...] vnd hab nit lenger verzug dann auf morgen. er werd auch nit lenger auß sein dann siben nacht (Tristrant 2024-2027) (それならば、トリストラントに、彼があなた〔マルク王〕のために旅行をすることになり、出発が明日より遅れることはなく、七夜より長く旅に出ていることはないとお伝え下さい)

また、werde + 不定詞が「～であろうとも」という、生じていない事態を表す場合もある。これについても、『指輪』で生じていない事態を表したのと同様と言える。

- (35) Nun müssen wir je durch alle land faren Wo man mit keylen vnnnd pferden hin mage. sÛchen ein frauwen wo wir dye halt vinden werden. (Tristrant 616-618) (さあ、我々はあらゆる国々を、船や馬で行ける所であればどこでも巡り、一人の夫人を、我々がその人をどこで見つけることになろうとも、探さねばならない)

ward + 不定詞との関連で言えば、『トリストラント』の werde + 不定詞は『指輪』と同様、特定の限定された意味を表さない。特に (33) や (34) では不定詞が sein であり、werde + 不定詞が ward + 不定詞から離れていることが窺われる。ただし、用例の数が非常に少ないので、werde + 不定詞がそれほど発達してきているとは言えないであろう。

### 3. 2. 3 würde + 不定詞

『トリストラント』の würde + 不定詞は、『指輪』と同じく、非現実の仮定に用いられる。まず、「もし～だったら」の前提に用いられた würde + 不定詞の例を挙げる。

- (36) Her Tristrant gürtet sein schwert vmb sich vnd stellet sich zû wör ob in yemand nach reyten wurd. das sy czû streit wären bereyt. (Tristrant 2238-2240) (トリストラント殿は剣を帯び、誰かが彼らを追って馬で来る場合に戦う準備ができているように防御の態勢を整えた)

非現実の仮定の表現において、前提に用いられる würde + 不定詞は少なく、多くは「～だろう」という帰結を表す。

- (37) wz **wurd** er jm **gedencken** (Tristrant 1219) ([私 (イザルデ) が彼 (トリストラント) に思いを打ち明けければ] 彼はどう思うだろうか)
- (38) Wie leichtuertig **wurd** er mich **schaczen** (Tristrant 1220) ([私 (イザルデ) が彼 (トリストラント) に思いを打ち明けければ] 彼は私を何と尻軽女かと思うだろうか)
- (39) solt ich sy tod wissen. vnd mich lebend. wie möcht jch ymer on sy geleben. jch **wurde** mich selber **tödten**. (Tristrant 2252-2254) (もし彼女 [イザルデ] が死に、私 [トリストラント] が生きていて私が知れば、どうして私は彼女なしにこの先生きられようか。私は自ら命を絶つだろう)
- (40) jch gedag des schaden den wir vnd das gancz land **enpfahen wurden**. (Tristrant 196-197) (その場合に我々と国全体が受けるであろう損害は言うまでもない)
- (41) Als wir das horten. begunden wir gemeinklich klagen. vnd nicht vnpillich der grossen schäden halb vnser angelegten hab vnd güt. die wir **nemen wurden**. ob wir nicht vol füren. (Tristrant 647-648) (我々はそれを聞いて、我々が計画を実行しない場合に、我々がそれにつき込んだ財産、所有物に関して我々が受けるであろう大きな損害のゆえに、皆一緒に、当然のことながら嘆いた)

また、「～するまで」という、まだ実現していない事態を表す würde + 不定詞もある。これは、まだ実現していないという意味で、『指輪』の (25) の目的を表す例と類似すると言える。(ただし、下の (42) は非現実の仮定の文の中に埋め込まれているので、非現実話法として würde を用いている可能性もある。)

- (42) So es sich aber also füget. das eines das ander nicht sahe. nur ein tag. so wurden sy kranck. vnnd so lang vngesund. bis sy wider an einander **sehen wurden**. (Tristrant 1079-1081) (一方、もし二人が互いに一日たりとも会わないということになれば、二人は病気になって、再び互いに

会うまで、ずっと健常ではいられないだろう)

『トリストラント』の würde + 不定詞が『指輪』と違うのは、間接話法で用いられる例が多いということである。(なお、(53)では非現実の仮定が間接話法で表されている。)

- (43) Er sagt jm auch dabei wie er sich wol verstünde. das man keynen fund der sich der sach vndersteen wurd (Tristrant 192-194) (彼〔トリストラント〕はそこでさらに彼〔クルネヴァル〕に、その問題をあえて引き受けようとする者は見つからないと自分にはよく分かっていると云った)
- (44) vnd enbot morholten dz er am driten tag zû rechter streit zeit kãm auf den wörd. allein [...] der würd jm zinß mit bringen den er vil zelang versessen het. (Tristrant 314-318) (そして〔マルク王は〕、彼〔トリストラント〕が三日目の戦いの時刻きっかりに川中島へ一人でやって来ること、[……]自分が長年怠ってきた貢ぎ物を彼〔トリストラント〕が彼〔モルオールト〕のもとへ持って行くことを使いを出して知らせた)
- (45) Jch [...] meyn meyn herr künig Marchs werde frey vor dyr sein. vnnd du habest des zinses genüge. wüerst auch füran nicht mer voderen (Tristrant 376-379) (我が君マルク王がお前から自由になるだろうし、お前は貢ぎ物を十分受け取り、この先これ以上は要求しないだろうと私は思う)
- (46) Darumb was er mit worten so käck gegen dem künig. vnd getrauet nicht das kein ander abred do sein wurde. dann dz man jm die schön ysalden geben solt. (Tristrant 746-748) (それゆえ彼〔内膳頭〕はあれこれ言って王に向かって厚顔に振る舞い、約束が自分に美しいイザルデが与えられるということ以外のことになろうとは信じなかった)
- (47) Bedenckt dz es eüren hohen namen vnd ere schwechen wurde. das jr mich in freüntschaft vnd güter handlung in eüer haus auf meinen schaden gefürt vnd gebracht habt (Tristrant 829-831) (あなた〔イザルデ〕が私〔トリストラント〕を親切に丁寧な振る舞いであなたの家に導き、連れてきたのが私を害するためだということは、あなたのご高名と名誉をおとしめるだろうということをお考え下さい)
- (48) deßgeleichen het auch der truchseß allen seinen güten herren freüden

- vnd bekanten geschriben vnd gebeten. das die auch kämen. vnd in jn küniglicher wirde vnd seinen grossen eren sehen. vnd jm darzû helfen solten. den er nit anders weßt. dann jm **wurd** der künig sein tochter **geben**. (Tristrant 916-921) (同様に内膳頭もすべての仲間、友人、知人に宛てて、皆さんも来て、自分が王の威光と大いなる名誉の中にあるのを見て、自分を援助してもらいたい、というのも、王がその娘を自分に与えるだろうということは疑いないからだ、手紙を書いて頼んだ)
- (49) Ditz bat sy mit fleiß zû volbringen. wann sy wol sorge hett. wurd es andern leüten zeteyl. daz denn nichssen güts dardurch **ersten wurd**. (Tristrant 1073-1075) (彼女〔イザルデの母〕は、それ〔娯楽〕が他人の手に渡ると、効能がそのために何も生じないという心配があるので、注意してそれ〔娯楽をイザルデとマルク王だけに飲ませること〕を実行するよう求めた)
- (50) vnd [Aucrat vnd sein nachuolger] mainten wol dz es nymmer ein verborgen ding **sein wurde**. (Tristrant 2046-2047) (そして〔アウクトラートとその一味は〕それ〔トリストラントとイザルデの不義密通〕は隠し事ではなくなるだろうと思った)
- (51) die lieb ward also groß. vnd jr kumer so manniguelte. das jr yegkliches sorg het. es **wurd** das ander **mercken**. (Tristrant 1135-1137) (愛情があまりに大きくなり、彼ら〔トリストラントとイザルデ〕の苦しみが多量に増したので、相手がそれに気づくだろうという心配を二人それぞれが抱いた)
- (52) wenn er forcht fund er tristranden der **wurt** soliche pfand von jm **nemen**. der er nymer überwinden möcht. (Tristrant 2284-2286) (というのは、彼〔アウクトラート〕は、もし自分がトリストラントを見つければ、決して自分には取り返せないほどの抵当をトリストラントが自分から取るだろうと恐れたからである)
- (53) wenn du nymbst villeichte für das du jr laide gethan hast an jrem oheim. ob sy des gegen dir ingedenck **sein wurde**. das jr denn nicht so wol miteinander **leben wurdet** als bilich wär. vnd sein solt. (Tristrant 1050-1054) (あなた〔トリストラント〕が彼女〔イザルデ〕の叔父のことで彼女を苦しめたことを彼女があなたに敵意を持って記憶にとどめるな



ら、あなた達はあるべき形でむつまじく共には暮らせないだろうとあなたは思うならば〔イザルデはマルク王と結婚する方がよい〕)

上の例のうち(51)は認識を表すということは言えるが、würde + 不定詞が特別に ward + 不定詞の場合のような限定された意味を表すようには見えない。ここに、ward + 不定詞の発達から wirt + 不定詞の発達へと移っていく過程で würde + 不定詞が果たした役割があるのかもしれない。すなわち、まず意味的な制限がある ward + 不定詞が発達し、そのあとで意味的な制限のない würde + 不定詞が発達した。その際、接続法 2 式の würde は形態的にも意味的にも werden の直説法過去をもとにしているので、ward + 不定詞が一旦発達すると、形態的にも意味的にも近い würde + 不定詞は比較的容易に用いられるようになったのではないかと考えられる。そして接続法 2 式は非現実話法や間接話法に用いられるため、特定の意味に限定される必要がなく、様々な動詞の不定詞が用いられるようになった。こうして wirt + 不定詞が発達する前提が整ったと考えられる。

紙幅の都合でここでは『フォルトゥナートゥス』の例を挙げることはできないが、『フォルトゥナートゥス』では、wirt + 不定詞が様々な動詞によって作られており、『トリストラント』で見られたような意味的制限はなくなる。その論証は別の機会に譲り、本稿では würde + 不定詞が中間段階として wirt + 不定詞の発達を促したことを指摘するにとどめたい。

### 〈引用出典〉

Fortunatus. Hg. v. Hans-Gerd Roloff. Stuttgart: Reclam 1996.

Ring = Heinrich Wittenwiler: Der Ring. Stuttgart: Reclam 1991. (Z. 1-8656 von 9699)

Tristan = Gottfried von Straßburg: Tristan. Bd. 1. Stuttgart: Reclam 1993. (Z. 1-9982 von 19548 Z.)

Tristrant = Tristrant und Isalde. Prosaroman. Hg. v. Alois Brandstetter. Tübingen: Niemeyer 1966. (Z. 1-2529 von 5193 Z.)

### 〈参照した邦訳（ただし用例の訳は筆者による）〉

H. ヴィッテンヴァイラー『指輪』田中泰三訳、早稲田大学出版部、1977年

ゴットフリート・フォン・シュトラーズブルク『トリスタンとイザルデ』石川敬三訳、郁文堂、<sup>5</sup>1992年

- 『トリストラントとイザルデ』小竹澄栄訳、国書刊行会、1988年  
 「幸運のさいふと空とぶ帽子」[Fortunatus]『幸運のさいふと空とぶ帽子・麗しのマゲローナ』藤代幸一・岡本麻美子訳、国書刊行会、1988年

### 〈参考文献〉

- Bech, F.: Beispiele von der Abschleifung des deutschen Partizipium Präsens und von seinem Ersatz durch den Infinitiv. In: Zeitschrift für Deutsche Wortforschung. 1. Bd. Straßburg: Trübner 1901, S. 81-109.
- Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Bd. 2. Heidelberg: Winter 1989 (<sup>1</sup>1924), S. 256 ff.
- Comrie, Bernard: Tense. Cambridge University 1990 (<sup>1</sup>1985) (邦訳: バーナード・コムリー『テンス』久保修三訳、開拓社、2014年)。
- Dal, Ingerid/eroms, Hans-Werner: Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. Berlin: Gruyter <sup>4</sup>2014.
- Diewald, Gabriele/Habermann, Mechthild: Die Entwicklung von *werden* + Infinitiv als Futurgrammem. Ein Beispiel für das Zusammenwirken von Grammatikalisierung, Sprachkontakt und soziokulturellen Faktoren. In: S. Grammatikalisierung im Deutschen. Hg. v. Torsten Leuschner et al. Berlin: Gruyter 2005, S. 229-250.
- Erdmann, Oskar: Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung. Stuttgart Cotta 1886.
- Fritz, Thomas: Zur Grammatikalisierung der zusammengesetzten Verbformen mit *werden* – *werden* und die Modalverben im frühen Deutsch und heute. In: Vater, Heinz (Hg.): Zu Tempus und Modus im Deutschen. Trier: Wissenschaftlicher Verl. 1997, S. 81-104.
- Kleiner, Mathilde: Zur Entwicklung der Futur-Umschreibung *werden* mit dem Infinitiv. Berkeley: University of California 1925.
- Kotin, Michail L.: Die *werden*-Perspektive und die *werden*-Periphrasen im Deutschen. Frankfurt a. M.: Lang 2003.
- Krämer, Sabine: Synchrone Analyse als Fenster zur Diachronie. Die Grammatikalisierung von *werden* + Infinitiv. München: Lincom 2005.
- Leiss, Elisabeth: Die Verbalkategorien des Deutschen. Berlin: Gruyter 1992.
- Paul, Hermann: Deutsche Grammatik. Bd. 4, Teil 4, 2. Hälfte. Tübingen: Niemeyer 1968 (<sup>1</sup>1920).
- Pfefferkorn, Oliver: Die Konstruktion *beginnen* + Infinitiv als Futurperiphrase im Mittelhochdeutschen. In: Von Ion der wisheit. Gedenkschrift für Manfred Lemmer. Hg. v. Kurt Gärtner u.a. Sandersdorf: edition scriptum 2009, S. 176-192.
- Saltveit, Laurits: Studien zum deutschen Futur. Bergen: Norwegian Universities

Press1962.

Westvik, Olaf Jansen: Über Herkunft und Geschichte des *werden*-Futurs. In: Raum, Zeit, Medium – Sprache und ihre Determinanten. Hg. v. Gerd Richter et al. Darmstadt: Hessische Historische Kommission 2000, S. 235-261.

Wilmanns, Wilhelm: Deutsche Grammatik. 3. Abt., 1. Hälfte. Strassburg: Trübner 1906, S. 171 ff.

重藤実：開始相表現の歴史と未来形『ドイツ語助動詞構造の歴史的発展をめぐって』重藤実編、日本独文学会研究叢書 015 号、2003 年、39-48 頁

嶋崎啓：ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響『東北大学文学研究科研究年報』66 号（2017 年）、252-224（(1)-(29)）頁

清水朗：中高ドイツ語構文“beginnen + Inf.”のいくつかの局面『一橋論叢』118 巻 3 号（1997 年）、487-502 頁

中村俊子（雅美）：“未来形”の用法拡大とその文法化について——ルター聖書における未来表現の変更事例をもとに——『エネルギー』29 号（2004 年）、23-37 頁

## Welche Rolle spielte *würde* + Infinitiv in der historischen Entwicklung des deutschen Futurs?

Satoru SHIMAZAKI

Das deutsche Futur wird vom Verb *werden* und einem Infinitiv gebildet. Da das Verb *werden* aber ein Kopulaverb ist, sollte es schwer sein, sich mit einem Infinitiv zu verbinden, denn ein Kopulaverb kann mit einem Nomen, das die Beschaffenheit des Subjekts darstellt wie "Arzt" in "er wird Arzt", oder mit einem Adjektiv, das die Art und Weise des Subjekts bezeichnet wie "krank" in "er wird krank", leicht verbunden werden, aber nicht mit dem Infinitiv, der einen Sachverhalt ausdrückt. Im Mittelhochdeutschen kommt tatsächlich die Konstruktion *werden* + Infinitiv ganz selten vor, sie wurde erst in der frühneuhochdeutschen Zeit gebräuchlich. Wie konnte das Verb *werden* sich mit einem Infinitiv verbinden? Dabei spielte eine große Rolle die Konstruktion *begunde/began* + Infinitiv. Diese Konstruktion wurde schon im Althochdeutschen gebraucht, im Mittelhochdeutschen häufig. Man darf hier nicht übersehen, dass *begunde/began* + Infinitiv keine allgemeine inchoative Bedeutung hatte wie *beginnen* + *zu* Infinitiv im Neuhochdeutschen, sondern in einigen beschränkten Verwendungen benutzt wurden: *begunde/began* im Mittelhochdeutschen wurde mit dem Infinitiv von einem verbo dicendi verbunden, das eine Äußerung wie *sagen* bezeichnet, oder von einem verbo sentiendi, das eine Wahrnehmung wie *sehen* bezeichnet, oder einem Verb, das einen körperlichen oder seelischen Zustand bezeichnet, den man nicht mit Vernunft kontrollieren kann, wie *lachen* oder *weinen*. Und diese beschränkte Verwendung übernahm die Konstruktion *ward* + Infinitiv im Frühneuhochdeutschen. Aber *wirt* + Infinitiv hatte keine solche Beschränkung. Hier muss darauf aufmerksam gemacht werden, dass sich *wirt* + Infinitiv entwickelte, nachdem sich *würde* + Infinitiv verbreitet hatte: Die Entwicklung von *würde* + Infinitiv gibt es als Zwischenstufe im Übergang von der Entwicklung von *ward* + Infinitiv zu der von *wirt* + Infinitiv. Die Konstruktion *würde* + Infinitiv, die sich nach der Entwicklung von *ward* + Infinitiv entwickelte, hatte keine solche Beschränkung wie diese Konstruktion, weil jene meistens gebraucht wurde, um einen irrealen Sachverhalt oder eine indirekte Rede auszudrücken. Die Unbeschränktheit machte *wirt* + Infinitiv möglich, mit allen Typen der Verben ohne Beschränkung zu verbinden und dann entstand das Tempus Futur.